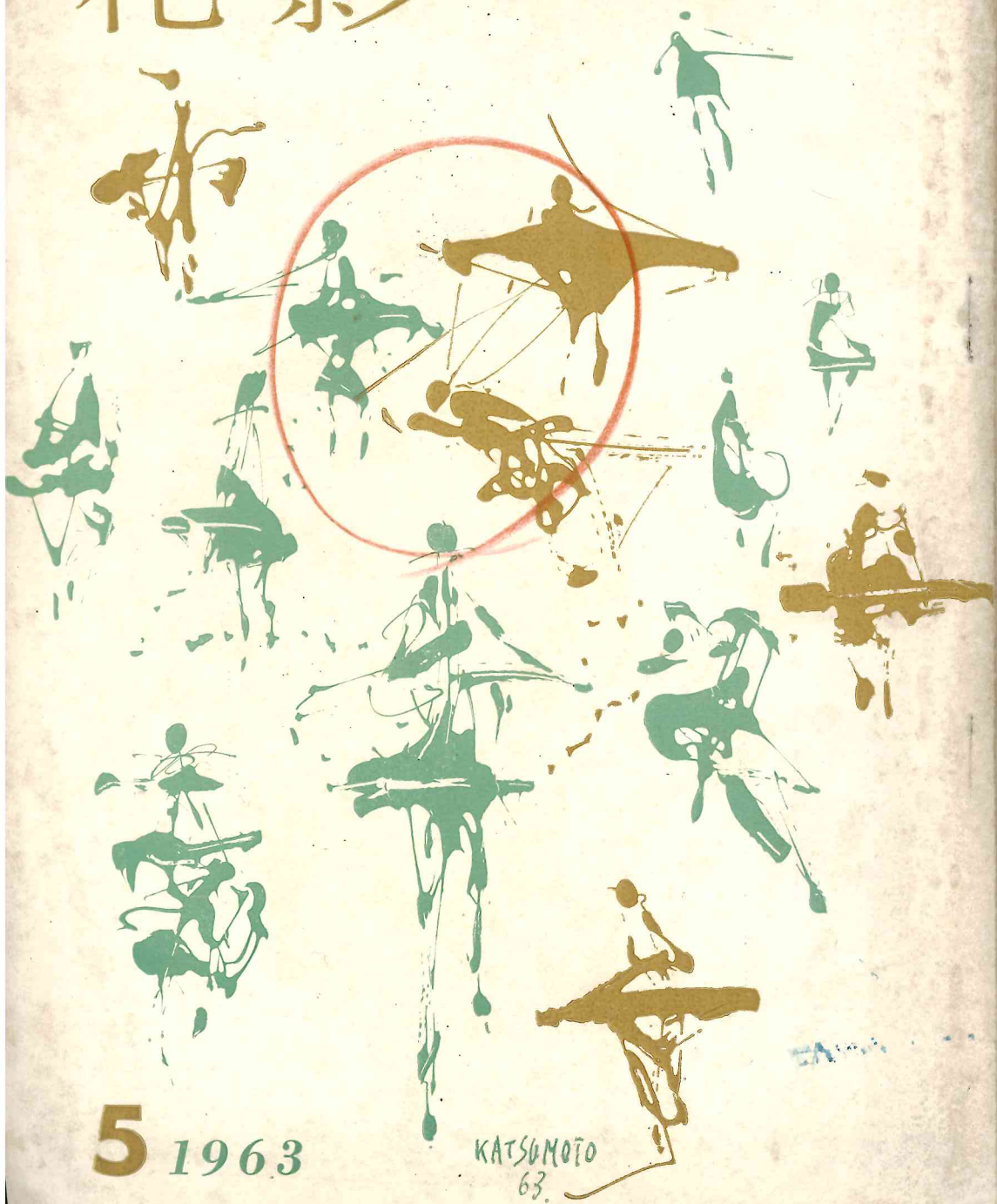


花影

昭和37年5月28日第3種郵便物認可
昭和38年5月1日印刷 5月5日発行 第3巻 第5号 毎月1回 5日発行

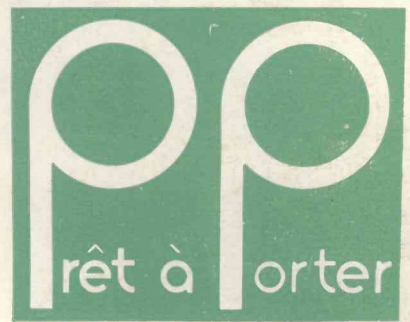


5 1963

KATSUMOTO
63.

花影 第3種郵便物認可
昭和38年5月1日印刷 5月5日発行 第3巻 第5号 毎月1回 5日発行

ブレタホルテ?!
パリ生まれ モードを知ってる高級既製服
ブレタホルテ?!
それこそ63おしゅれビジョン 世界の流行
ブレタホルテ?!
パリの王座を担うルイ・フェローがつくる
ブレタホルテ?!
中村乃武夫もパリ在住の平田曉夫もつくる
ブレタホルテ?!
パリ西武アトリエから2月18日に西武到着



池袋・木曜定休・電話大代表 (983) 0151 **seibu** 西武



花影 五月号 目次

サツポオ二篇	呉茂一 訳	(3)
作品I	宮崎智恵 大伴道子 苑 翠子 森重香代子 有川満智子 中市 弘 加藤正民	(4)
作品II	朝倉綾子 山 年子 中川三津子 佐藤のぶ 渡辺久子 横山憲一郎	(7)
さつき集	守口 忠夫 辻林美代子 中沢さき子 宿谷ゆかり 植田道子 小山 撰子 神野 美江 塩井ひさ 木村 一 及川 ちよ 秋山 末夫	(9)
巻頭詩サツポオのこと、其他	秦 一郎	(12)
出版記念会の録音から		(13)

表紙・カット 勝本富士雄

サツポオ二篇

呉 茂一 訳

星はあきらけき 月のあたりに
はしけやし 姿をひそむ
しろがねの 望のひかりの
陸にさやけく 照りわたるとき

さながらに紅の林檎の
色づいてみづ枝に高く
いと高い梢に高く
摘む人の はて見おとしか
いや 見落せばこそ
かひなとどかぬ
その紅りんご

巻頭詩 サッポオのこと、其他

秦 一郎

詩聖ホメーロスは姑く措く。たまたま希臘詞草集を按ずるとき、メレアグロス、アスクレピアーデスらの、マイナー・ポエツトは、割愛しても、先ずサッポオとアナクレオンに指を屈しなければなるまい。一はミュティレーネーに他の女流詩人等と相愛同棲、後に美少年パオンとの恋に破れ、レフスカの巖頭から入水したと伝えられる絶代の中輻詩人、一はたまゆらの生命を一杯の美酒に託した「ひとり歌」の創始者で、オマール・ハイヤーム、わが大伴旅人らとも血脈ある酒と恋の達人——この二詩人については、明治浪漫派のために万丈の気を吐いた文芸評論家高山樗牛が椽大の筆を揮っていち早く唱道祖述している。特にサッポオについて若き日の樗牛は、大衆時代の盟友、姉崎嘲風とともにギリルバルツェルの悲曲「サッポオ」を携えて熱海に遊び、魚見が崎の断崖に臨んで、遠くギリシアの巖頭を想見しながら、この不世出の女詩人の跡を偲び、哀艶清楚な散文調の美文「わが袖の記」一篇をものして心ゆくまで才筆才情を恣まにしている。樗牛の名文は当年の青年士女の渴仰の的であり後進ながら明治生れの僕らも一時、パイプルの如く愛誦したものであるが、若い世代の読者には纏綿たる彼の名調子も恐らく風馬牛であるうから、引用は差控えるが、綿々としてつきぬ樗牛の詠歎も結局、「さっぽおの死や晩かりし」の一語につきよう。事実、「ああッさ

っぽお」汝はたぐひなき詩人なりき。其奏でる琴にはうつつし世ならぬ響きを宿し、其歌ふ歌には天上の声ありき。へらすの人人はなを詩神の列に加へて「おりゆむぶ」のやしろに祭りにき。」と、その讃辞にもある如く、彼女は十番目のムーサ（ミューズは九柱の女神たちだから）と呼ばれて、夙に詩神の列に加えられていたのだしかもその讃嘆と名声にも拘らず、彼女の珠玉の如き詩歌は、多く恋愛に関わりあるというだけの理由で中世紀焚書の厄に遭い、今日エジプトの塵塚に埋れた断簡やメデア・ノルサ陶片などからわずかに往時満開の薔薇の榮を矜髣し得るのみである。彼女の詩集の巻頭を飾る有名な「アフロディテ禱歌」はミュティレーネに於ける（紀元前七世紀末頃の）サッポオの生活の詩化とも謂われるもの、爰に掲げた訳詩二篇は掌篇ながら、月明の詩はその簡素な美しさ、希臘古詩中の絶唱とも称され、月明星稀の主題も謡曲「融」の末段や、東坡の「赤壁賦」の一節などと符合している点も面白く、又後者は民謡風のものだけに、古来人口に膾炙され、D・G・ロゼツチを始め、上田敏にも優訳もあるが、ここでは原典に精しい呉茂一氏（僕の東大古典研究室通学時代の旧師）の口語訳を採った。

サッポオ逝いて幾千年、その衣鉢を伝えた閨秀詩人は東西古今、その跡を絶えぬ。知らず、かの優婉と高雅の調べ妙なる七絃琴に協せて、新しき世代を奔放に歌い上げる七歩の才は果していかなる女人であろうか。

一九六三・四・一二夜しるす。

歌集「風祭」 宮崎智恵著
歌集「道」 大伴道子著
随筆「冬の旅」 大伴道子著

出版記念会の録音から

昭和38年3月10日
赤坂プリンスホテル
司会 斉藤 正二

皆さんに、始めにお願いしたいんですが、お二人は何処にいらしたら一番いいでしょうか（笑）普通は高い所に、雛壇という所にいるんですが、あれではおもしろくないでしょうし、照れちゃうでしょうし、又集った方もなんやらまぶしい様に思ってもいけませんから皆さんでお二人を本当に心から励ますという気持ちで囲んでいただきたいんです。型を破りますけれど、始めに先ず乾杯をしていただきたいと思えます。

乾杯の音頭は、普通は挨拶をされる方と別なんです、今日は、矢張り型を破りたいという意味で、日本歌人の主宰の前川佐美雄先生に

前川 お二人どうぞ乾杯して下さい。——拍手
皆さんどうぞ乾杯して下さい。——拍手

司会 ここでもう一度前川先生に御登場願いまして、お二人の作品について色々とお批評なりお励ましの言葉をいただきたいと思えます。——拍手——

前川 司会者の斉藤君に指名されましたんでえらい突っぱなで、皆さんに恐縮ですけれども一番突っぱなは、歩が悪いんで……後でしたら段々とその調子に乗る方で、跳子馬に乗って走るといふことがあります。関西ではそう

申しますけれども、始めは調子が出ませんでどう云う事になりますか、宮崎さんの場合は第二歌集、それから大伴さんの場合は第三歌集なんですけれども、宮崎さんは、これはこれも向こうの言葉でいいますと、しんねりむつりと言いますか、まあゆっくりやる方で第二歌集なんですけれども大伴さんの方は、これは少し馬に乗って走られる方かどうか知りませんが、非常にスピードがあつて歌集の方は、第三歌集、そして飛行機に乗って世界をすつと走って行って飛んで来て、そしてすぐさま一冊の「冬の旅」と言う様な随筆集を書かれると云う風で非常にその……まあスピードが早い、お二人は夫々に今の歌集の出し方、歌の綴り方、そういう様に随分違うんですけど全く違ふと思う位で、正反對かも知れませんが、お二人は非常に仲が良くて、皆さん御覧下さいましたら分かる様に、お二人共、非常に美しい方で、そして歌も風は違いますが、非常に美しいか良いかという事は此処へ今日お出で下さいました皆様方に、お祝の言葉を……お祝の言葉でなくてもいいんですけどまあ、お祝いですけど色々お話し願いたいと思えます。私はいろいろ申しますとどうも手前味噌になりそ

うですし、お二人を良く知っております。今日はお目出たいと云うことだけ申し上げて、そして皆様方がこの雪の日に、お二人の会のお祝いにお越し下さった事を有難く御礼申し上げます。まあこれくらいで初めです。それから申し上げていただきまして、又後程何を申し上げるかわかりませんが、その時はお二人をうんとその棚下しをしようかと思っております。拍手——

司会 どうも有難度うございました。皆さんが緊張して、女の方なんか、特に前にある折角のご馳走に手をお出しにならない様ですから、ここで五分乃至十分間おひまをいただきまして、自由にまず食べようという事に致します。

それから男の方は飲んで下さい。女の方も飲んで結構です。——(笑)——で、両夫人に励ましの言葉をかけて上げて下さると、司会者として大変嬉しいんです。それじゃ五分間乃至十分間、皆様の食欲に奉仕を致しますからどうかご自由にお行儀悪くして結構です。

——音楽——

司会 お祝いのお言葉をいただく前に、お二人にお祝の花束を贈呈したいと思ひます。

大伴さん、それから宮崎さん此処へいらして花束を受取って下さいませ。(拍手)——それでは、又席にお着き下さいませ。お二人が花束をいただきましたけれど、私達も心の花束をいただいたという気持ちになっております。あのそんなに緊張なからず——緊張は司会者一人で沢山でありますから(笑)どうかテーブルを囲んでお行儀悪く何かつまんで下さいませ。

それではお祝いのお言葉をいただく事に致します。今日は、青柳瑞穂先生が来ておられますので、青柳さんには「日本発掘」という大変優れた著作が、おありになるのですが、我々短歌を好む者にとって、その短歌という世界は日本発掘の最初にならないのか、或は両夫人の今度のお仕事をみてどの様に発掘をなすったか、それをお聞きしたいと思います。青柳先生をどうぞお願い致します。

——拍手——

青柳 司会者の方、随分残酷だと思ひます。こう云う話をさせる前には、一寸前何か云って下されば、その間に物を考えることもできません。でも、いきなりささやかな発掘では、どうもどうも甚だ困つちまひまして、宮崎さんを私は、これもほんの三度か四度位

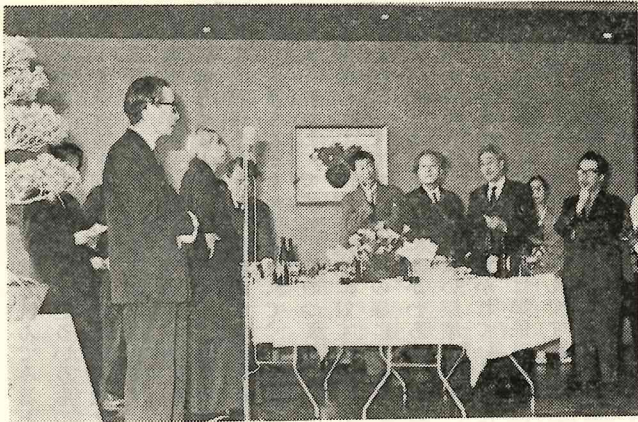
しかお目にかかりませんし、大伴さんには今日始めてお目に掛る様なわけにして——私は詩を書いて、詩って昔の新体詩の様な詩を書きましたけれども歌ってエのは、まだ一度も作ったことがないんで、自分が作った事がないと、どうしても親しみがありません。丁度本

すけれども、宮崎さんの「風祭」は、丁度本が出た時にいただいてまして、お子さんのことや、何かかいてあった記憶がございますけれども、なかなかとしてやわらかさうでないながら、しなしなとしていながらくじけそうではないながら、案外中々しんの強い、そういう風な印象を私はっきり憶えておりますけれども、どの歌が好きかと云う事になるともう記憶がございません。道として「冬の旅」は今日いただいたいて帰ろうと思っておりますから、ゆっくり読ましていただきます。私は全く資格がないんです。(拍手)(笑)——

司会 どうも有難度うございました。その次には大伴夫人の「道」とそれから「冬の旅」について、お話しをいただきたいんですが作家の宮沢先生が来ておられます。宮沢さんには「雷帝堤康次郎」という、大変おもしろい、面白いというところ、この実感あふれ過ぎていけないのかもしれないんですが、大変面白

い著書があります。その中に大伴夫人が登場されるので、ここで何かその本の中に入らなかつた様な部分を、あばくと同時に励ましていただく、祝っていただくと云う形、又司会者は無理な注文つけるっていわれるかもしれませんが、富沢先生にお願い致します。

——拍手——



富沢 じゃお言葉によりまして、私、富沢有為男でございます。

私は本来の職業的な小説家ではございませんが、小説で一時飯を食っていたとそれから若い頃は、余り絵も描きたくないのに、母親から無理矢理に押しつけられて、岡田三郎助家へ行きまして絵を習らつて多少絵かきにもなりかかつて外国へ行つたりして、まあ一生何かアマチュアみたいもので暮した様な者でございます。一体小説等やる場合には、大体詩から出発して行くのが、これは常道でございます。私にしまして、私の友人になる諸君は小説迄なくとも、大体はもう詩、歌、詩歌の道は皆心得ているんであります。

例えば今日此処へ出席しておられる、浅野晃君や、中谷孝雄君あたりが、これは立派な歌人とし詩人としての道を歩んでこられた方でありまして、所が私は、さき程も申しました様に、甚だ乱雑な育ち方を致しました為にこの詩歌の道も心得ずに、つまり小説家の様なツラをしてしまった人間でございます。従いまして、歌に対する批評と云うものは、到底出来るものでございませぬが、実は歌は時々は、まあ人様のものを拝見して居るんで、偶々、今度然しみつちりと大伴さんの歌集並

に宮崎さんの歌集を拝見せざるを得ないまま、つまり羽目におち入つちまひまして(笑)それで読み出したんでございますが、どうもこれはいささか歌という物は、小説とややちがう(笑)小説でしたら大がいに一晩で読み込めるんですが歌は、これは、一週間かかって十日かかって、これは駄目なんです。昨日福島の田舎から出てまいりましたが、もう此処にも風呂敷包で持ってきたんですが、車中でも読み、又今日は床屋へ行つても床屋の間でも読み(笑)そして、此処迄その風呂敷包を持って参りましたが、まるでこの頃、大学の試験に行っている我が子の様な状態でございます。試験勉強をしている様な状態でございます。で、宮崎さんの歌についてはこれは外の方にごなたかお話があるだろうと思ひますが、そういう状態で、大伴さんの歌を全部は未だ一週間以上かかりましたんで、それを、それを又反復して読んでみて、今日又、頁を開いてみるとまるで新しい歌を読んでいる様な気がしてございませぬ。

ただ正確に私は一度読んでいた所を、二度、三度読んで又、新しい感じをする位でございますから、非常に困難なもんだと思うん

でございますが、これを、然し読んでみると側々と追って来るものがある。どういものかといいますと、可成りこれは肉体にこたえて来る様なものがある。相当深いものです。これは私共がはるかに大伴さんを、遠くから眺めておりますと実に不世出の英才を背の君として、お持ちになっておられて立派な御子息や、お嬢さんをもっておられて、これ程幸福な人生に對してですね、何のつまり、とにかく疑もなければ、何等人生に對する抵抗も感じられなくてです、実に花の様におだやかに暮しておる方だと思ふにかかわらず、この歌集を読みますと、非常に深い深淵の中に、息づいている魚の姿などを描かれているあたりは仲々深いものがある。私は御子息の清二さんの詩にも、それを感じたんですが、清二さんの詩も非常に激しいんですね。何か不満というものか何か孤独というものか、そういうものが非常に粘り強く、生きてるんではないですが、これがお母さんの歌に這これが仄めいて、私は実にその驚いて居るんではない

実は、今日は私の師匠の佐藤春夫に会いまして、偶々風流論というものが出来まして、つまり人間の性格が芽であり、幹であり技であ

るとすれば俳句の如きは花の如きものであろうと、人生はむこうにあると、然しながら風流というものは、その人生の枝に咲くものである。所が現代の風流になると花をすててですね、枝に入り幹に入り次には、根を一生懸命ゴシゴシと洗い落そうとする様な、風流の道に入って来ると、こういう風ではす



ね、實際上我々の考える風流とはいささかちがうと、現実の生活と描かれるその上に出て来る夢の様な、風流の作品の世界というものは、同じものではあるけれども何かこの上から昇華して出て来るものでなければならぬと、いうまあ、偶々師匠の説もあり、私も非常に同感しておりました。ただ俳句の場合が最も風流の道に通じるものではなかるうかと歌になるともうそうとう観念の問題に入ってきて、そういう人生上の悩みをぶっつけるとまあ、昔から多くは、これは傑作は、古俣か相聞の歌になります方ですけれども、まあ大体その人生の悩みをうったえるものになる。

観念の世界に入ると来ると、その点や小説と近づいて来るものだと、いうことを、お互に話し合っておりました。先程、前川さんのお話にお二人の歌が非常に美しくといわれました。誠にその点、根っ子でもなければ、幹でもなく、枝でもなく、まさに爛漫と咲く花だとは思いますが、然しその花の中に矢張り地中に深く下した根の悩みというものが可成り強く反映しておると、全く奥さんこれはね、私はあの歌集をもう少し研究させていただきまして、更にこれは「雷帝」の上に何か加えなければならぬことが出来て来るとござ

いましよから、清二さんなども実生活はデパートの方に、デパート許りじゃなくて、全世界を股にかけておられる様ですし、この前池田首相の演説をさそい出される時等は、これは全のお父さん以上の政治家の様な実体の生活をしておられるにもかかわらず、一方あれだけの詩を書いておられると、まあこう云う不思議なんですね。日本で新しく出来た商売人でない歌人、詩人と云うものとしては相当深いものがあるという事を私今日これは本当にお世辞ではなく、お賞め申し上げたいと思ふでございます。——拍手——

司会 どうも有難度うございました。あの打ちとけるというのは、矢張り短歌と云う文芸の中での一つの要素ですし、緊張と云うのは、作詩の中だけでいいんです。ですから後は、はげまし合って、気のあった者が、励まし合うと云うのが、短歌文芸の一つの本質なんです。それから、どうかお行儀悪くて結構ですか、ムシャムシャやって下さって結構ですか、お願い致します。それでは、次に風祭について、詩人の田中克己先生が来ておられるので、簡単に結構ですから、一寸お祝の言葉なり批評の言葉なり話して下さると大変結構だと思ひます。——拍手——

田中 訂正申し上げます。詩人と申されましてあれども、詩なんてもう一番キライなものでございまして、詩人といわれただけで、もう物をいうのがいやになっております。それを取り消していた上、申し上げたいことを今から考えてみようと思ひますが、話せば長くなりますが、宮崎さんと私は呼んでおりまして、早川さんということは滅多にしないでございます。早川さんとなられます前、今から二五年前の宮崎さんは大変美しいお嬢さんでいらっしやいましたが、意地悪でございまして、私に一言も物を言っていただけなかつた様な気が致します。此の間昨年来に久振りにレインボーグリの跡へ参りました、そして計らずも思ひ出しました。本日ここにおります長尾君や、その他の方々が余り流行らない出版をしておられまして、その席上、いつも校正ばかりしておられて、私の方を一寸も見ていただけなかつた。ただ何となしに歌をお作りになるといふことを、私は存じておつたものでございまして、その頃にもう少しお話ししていただければうれいなど思ひましたが、それから二〇年あまりたちまして、今度は早川さんになられまして、それども、旦那様がいらっしやらない。こうなりま

すとまたお話が難しくなりましたですね(笑)その何も承つてもおりません。唯、私はこれも又不思議なことでございますが、今勤めております所が、成城大学と申しまして、日本の民俗学の生みの親でいらっしやいます、柳田国男先生が毎日の様にお越しになる所にいます。そこで段々と民俗かぶれをして参りますと、早川さんの「花祭り」の研究なんか非常に学生にまあ読まれなさいいけないといつて、すすめなければいけない様な立場にありましてすね。そんなわけで、宮崎さんが段々早川智恵さんになつて来ておつたわけではあります、この間久し振りに、お歌を読まされることになりました。そして、これから歌の話をしなければいけない、で、何でこの方は歌さえお作りにならなければ、こんな幸せな方ないんだがなあという感じが致しました(笑)——拍手——

大変無茶申しましたけれども歌人でない時の早川さんなり、或は宮崎智恵さんとゆっくりとお話し申し上げた上で、本日のお詫びを申し上げたいと思ひます。——拍手——司会 歌さえつくらなければ、仕合せなんだという様な、此処に居る多くの方々には、皆何か、悲しい様な同時にうれしい様な気持ちも

たんじゃないかと思ひます。今度は、ここに作家の寺内大吉さんが、お見えになつて居るんで、先程富沢さんから、何か真正面からお話していただいたんですけど、ここで会場の皆さんにこう、あつといわせる様なお話しを伺えれば、何か錢として大変いいんじゃないかと思ひますんで、寺内さんにお話を伺ひようと思ひます。——拍手——

寺内 先程誰かが大変残酷な指名だとおっしゃつたんですが、私もその今、残酷さは大変身に泌みておりますが、というわけは、私は清二君とずっと前からの友達でございますもんで、いわゆる大伴さんは、昔からお母様でいらっしゃるもんですから、一度も未だ、そのお話しを申し上げる時でも、正面で顔を上げて、お話しした事がないんであります、常に私も父母に孝行を盡しておりますもんですから(笑) 清二君のお母さんという態度で接して来ているんであります。え、まあヨクるといっても余り、そのあれがないんですけれども、最初にお目に掛つたのが、今から八年程前になりますが、森田さんという方の妹さんの御縁談の事がございます、実にこれももういいかげんなもんで、森田さんの妹さんが、誰か良い適当なおむこさんが居なからう

かと、ふと茶飲み話に出た所、私の友達に一寸適當なのが居ると、それじゃ二人を結びつけてみようかと、非常にもう何か猫の子か何かをやったり、くれたりする様な感じで、この縁談の話を始めたんであります。その時も、これは余談になるんですが私の友人を口説くの、とに角こう云う娘さんがいる、然し決して美人じゃないぞ。これは皆様にも申し上げておくわけなんです、余り大きな期待をかけてはいけないという事を、ご縁談の時に申し上げるんで(笑) その友達は私と会うたびに「俺ん所の女房は美人じゃネエからな」とこう云つておりますが(笑) こう云う様な事で、兎に角この縁談が、ウソみたいにスムーズにまとまりかけたわけなんです。

えーいよいよ結納という時になりました、私と清二君とが、この結納の使者になりました、何か妙なお三宝みたいな物を持って両家を行つたり来たりしたんですが、堤家にやつて参りまして、お母様が厳然と控えておられてそういう一こと一ことに我々の態度はどうもよくない、真じめさを欠くというおしかりをうけた記憶があるんであります。(笑) エー何かこう茶化してその縁談をまとめた様な、そういう印象がございますもんですから

増々今迄頭が上んなかったのが……(笑) 頭がどうしても上らないと、然も先般ご本をいただく、お名前も実にこれも、もう万葉歌人の様な、壮大な歌名でいらつしゃつて(笑) まあどう分の間、じかに拝えつを受けるとも(笑) 一寸エーあれの様な感じでありましたが、今日は幸いこう云う機会に接しまして、やや上段の方から、お母様に向つて一言申し上げることが出来たんであります。まあいささか、本懐といたす所でございます(笑) 大変どうも簡単でございますけれども(笑) ——拍手——

司会 司会者も又、大変本懐でありまして、今度は作家の中谷孝雄先生がこられてるので、宮崎智恵さんの若い頃の矢張り本懐とする様なお話し、おかしな矛盾した所ですけれども、聞く方が面白がる様なお話をどうかしていただけたらと思ひます。それからどんどん又召し上つて下さい。司会者、すごく喰いしん坊なんですけど、我慢するのは、キリストが人類のかわりに死んだ様に、一人で沢山ですからどうか、他の方は不作法に召し上つて下さいませ。——拍手——

中谷 宮崎さんの若いころの話をしろ、で、皆が面白がる様な話つていふんですが、私も

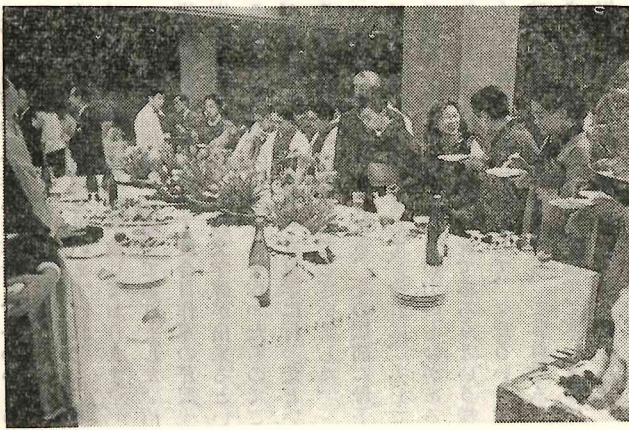
娘さんの頃から知つて居るんですけど、先刻田中君がいきました様に、宮崎さん僕に一寸ももの云つてくれませんでしたから。アノ結局は知らないわけでありませう。姿だけ知つていてどういふ方か、一度も話した事ないと思ひます。ですから宮崎さんの若い時の事は、折角の御注文ですが、お話し出来ないんであります。

去年、私は無暗やたらに本が読みたくて本ばかり読んで暮したんですが、後でふりかえてみると、余り矢張り心に残つて居る本はないんです。それで結局いくつか心の中に残つた本の中に宮崎さんの本や、大伴さんの本があることを、今日私は非常によろこびとするわけでありませう。宮崎さんの歌と、大伴さんの歌は、先程前川君が云つた様にずいぶんちがつて居ると思ひますが、宮崎さんの方は何かしんねり、むつりつりつりという先程前川君がいました、なんとなしに、こう柔軟な体の歌です、大伴さんの方は非常に直截な感じがするんであります。ですからこの二人の方の歌を読んで、どちらも心に残つたつていうことは、非常に自分としても面白いと思ひます。——それからまあ、歌のことは余りいふと、素人が何をいふかという様なこと

で、恥ずかしくなりますから、マア止しまして、非常に人間でエのは小説家風に読む所もあるんであります。で、お二人の歌を読んで小説家風な感想を一寸述べますと、アノお二人共、先程からも前川君が言つた様におきれいな方であるのに相聞の歌が一寸もないんです。これは私非常に残念に思ひました。アノ相聞と申しますと、何かこれ奥さんですからどうも変な事になりますけれど、そうじゃないんで、例えば、これこそ大伴ですが、大伴坂上郎女が大伴家持に贈つた歌なんか、これ自分の娘の亭主に贈つた歌ですけれど、非常にこう矢張り相聞の感じの出た歌があるんで、何かそういうものがお二人の歌にない様な気がするんです。これは残念に思ひました。それから大伴さんがこんな世の中を不満に思つていらつしゃるの、これはまあ矢張り色々あるんぢやないと思ひますが。(笑)

然しどちらの方も矢張り結局、女の幸福つてことを僕感じたんです。それは、例えば、大伴さんの歌には、お父さんが非常に理想の人としてうたわれておりますし、又お子さん方に対しても、無条件の愛情でうたわれております。宮崎さんの場合も夫、それから子供つていふものが非常に無条件、つまり何か、

それが絶対なもの様に歌われているところ、僕等が、僕は非常にうらやましくつて、僕等は自分のオヤジだつて、そんなに理想的に思えないし、息子なんつていっても矢張り、こんなもの(笑) 何もそんなにあのころ非常に絶対の感じしないんですが、そういう点で矢張り、女の人つていふのは、男より色々不満を



持ちながらも幸福なかもしれないと思って非常にうらやましく思いました。——拍手——

司会 どうも有難度うございました。先程寺内大吉さんにお話していただきましたけれどその悪友の二人である、悪友というところ、お母さんはいやがるかも知れませんが、大伴夫人のご子息の堤清二さんが来ておられます。今日は、ただしその悪友の方ではなくてエ、悪友の方はそのままでもかまいませんけれど、先程もお話がありましたけれど、辻井喬と云う名前で詩をかいていらして、室生屋賞も受賞されておりますし、今日はそういう目のある一人の詩人として、母親の作品をどう見るか、個人的なことは、お家にお帰りになれば、いくらでもなされるでしょうから忌憚のないご意見を、作家大伴道子に対して与えて上げていただきたいと思えます。

お母さんの歌の今後はどうしたらいいかっていった様なことも云って下さると有難いと思います、それから宮崎夫人の風祭についても意見を詩人として述べて、店長としてならば、云うことはよく働けるでしょうから(笑)それから感謝と奉仕とよくおじぎろっていう位だと思えますが、そんなのは、今日は聞きたくありませんし、作家としての立場、詩

人としての立場から、詩人同志の言葉としてお話していただきたいと思えます。

辻井 辻井でございます。大変話しくくなくてしまいました。と申しますのは、正面からのお話と裏側からのお話が出ましたし、つい只今は、中谷先生から絶対かどうかという風ないい方、矢面に立たされて、非常に話し難くなりました。それで、作品のごとでございますけれども、これも又、実に話しくいのです。と申しますのは矢張り、読みますと身につまされる。最初の明窓という歌集が出た時も、そうでありましたけれども今度の三番目の歌集でも、私はとても最初から終りまで読めないわけでございます。まあ或る意味でつらいし、或る意味で色んな事を考えてしまいますので、従って、先程富沢先生から話ありましたけれども、私もどこをどういう風に読んだかという記憶がございます。その時、手にとって二つか三つ読むという風な読み方をしておりますので、大変、難しいのでございます。宮崎さんの作品については、これは、多少気が楽でございます。普通私は、作品は信頼しませんが、その作品を書いた人は、信頼しないという悪いくせがございますけれども、宮崎さんの場合に

女史のサラリーを少し上げて……その歌碑の方は、小ちゃくていいですから(笑) 拍手) 司会者は中々の苦勞人ですから、又貧乏と仲が良いもんですから、宮崎さんが貧乏だっというんじゃないですよ(笑) ついそんな余計なこと云って、然し今の母子像から、歌碑の語本当に泣かされました。

れども、この芹沢先生のは私が良く知っております、向井良吉さんが設計をいたしましたコンクリートの板、堀、板の様なものの中に笛が仕込まれております。西風が吹きますとその笛が鳴る。波が寄せている岩の上に立っております。実は私も帰って来ます汽車の中で、何時かそういう機会に恵まれましたならば、この大伴、宮崎両作者の文学碑をお二人が一番好む場所の一つ建てたいと、皆様のご後援を得て、建てさせていただきたいという様な事を、実は考えております。(拍手) これはまあどうぞ、今日のお話がございます様に、正面からも裏側からも、横からも一つ応援していただきますことを、心からお願いたしましたして、まともない御挨拶とさせていただきます。——拍手——

司会 どうも有難度うございました。どうもこういう親孝行の存在、矢張り我々は、低級な人間だということを思われますが、母子像のことから、お二人の歌碑を建てて上げたいという話、大変泣かされました。あなたを歌をお作りになった方がいんじゃないか。(笑) 歌心というのは、そういうことです。然しその前に、宮崎夫人が婦人ホールに働いておりますから、前貸しでも結構ですから、

文芸評論家の林富士馬さんが来られておるんで、林さんお願いいたします。林 僕はあの今、評論家っていうご紹介がありましたけれども、西武の傍で小児科の町医者してるんで、アノ一対一で話すのはなれてますけど、こういう晴れがましい所で、外の人聞いてるのは、商売柄なれていませんで、上手に言えませんで、ただ僕は学生時代から、学問も哲学も宗教も皆面白いんですけれども、どうも身につかなくて、文学っていうものがあって、それが非常に楽しみでそれはどういもんか判りませんが、依り処にして今迄生きて来て、それは大伴さんも、個人的には存じませんで、きつとそう云う文学っていう事で、こういう席でお祝いを述べられることが出来るんだと思って、同業そう文学の愛好者の一人として、お慶びをきれいな本をいただいてどうも有難度うござ

は、その作品も、書いた作者も、一つのものとして信頼出来る、マ信頼ということは、大変言葉が不適切だと思えますけれども、信じられると云う様な気が致しております。

実は私先程沼津から帰って参りました。沼津に参りましたのは、丁度今日作家の芹沢先生と、井上先生の二つの文学碑が出来るといので、私の友人達がそれを作ったものでございますから、それを一寸見学に行つたというのが、実は一つの目的でございました。

沼津の駅を下りましたら、その駅前に母子像というのがございまして、それに、もしこの世界で原子力よりも大きい力のあるものがあるとしたら、それは母親の愛であろうという様な文字が彫んでございまして、マそういう意味で実は私今日ありますのも、これは歌人であります大伴道子さんのお蔭でございまして何と言っているのか、良く判りません(笑)

拍手——その物理的にもそうですけれど(笑) 矢張りより多く精神的にそうだと私は、この頃つくづく感じております。それが話が横にそれますけれども、芹沢光治良先生の文学碑が非常にいいものでございまして、これは普通文学碑というものは大体そのお蔭の様な感じのものが多くございまして。け

いました。——拍手——

司会 どうも有難度うございました。大伴夫人は多芸の人でありまして、油絵をお描きになつて、ま、私は素人で良く判らないんですけども、大変上手なきちとした絵をお描きになって、感心させられるんですが、今日は画家の山本蘭村さんが見えなくなって、絵の事を中心に或は大伴夫人の随筆集でもいいですが、そういうヴィジュアルな面の大伴夫人のお話をさせていただけたらと思えます。山本さんお願いします。——拍手——

山本 今、絵のことおっしゃいましたけれども、私も勉強中では、まあ一生涯通しても到底満足する様なものが出来ないので、とやかくと云うこともあれなんでしょうが、浅間を中心にそういったモチーフ、そういったものに、非常に深い感銘をうけました。で歌集を頂きました私は、吉井勇先生が生きていられると、丁度此年八五になるんですけれども、私の母のお友達でございますので、私も以前から吉井先生の歌集が、非常に好きなんでございますけれども、今ここに一寸その良き弟子でいられる大伴道子さんの歌を三つだ

け読ましていただきたいと思ひます—拍手—
われも又移し植ゑたる花の夢なほ故郷
の土に恋ひつ

しんしんと朝の窓辺の明るめば雪を
区切りてライン流るる

悠久の静けさありて唐松の林にいれば
鳥の鳴く声

司会 夫人が所属されているアヒル会、半アマチュア、半プロの様な油絵の集りですが、その熱海正子さんと云う方が是非、絵について、しゃべらしてくれ、で花東もついでにお二人に差上げたいからおっしゃっていますんで司会者はそれを、よしとして(笑)熱海正子さんをお願いします。

熱海 大伴さんの絵は、お歌と同じ様にその季節によって、何か大変に明るかったり、暗かったりやさしかったり、もうそれがそのお歌と同じ様な色とタッチとが出て、女性の私から見ますと「あー大伴さんて今こういう風な気持ちでいらっしやるんだな」という風な感じにおみうけて、その絵の表情もものが非常に端的にお表しになっていただけなのは女同志大変に嬉しいと思ひます。大伴さんなかなかの、深窓の奥様でいらっしやるんで、なかなかお目に掛る機会がございません。



絵ではしょっちゅうお目にかかっているんですけど、こういう会へお招きいただいて二、三年振りで非常に明るくて、増々おきれいで、何かとってもお若々しくなっておられることは、先刻からあのお見受けして大変喜んでおります。お歌の方は私が、ささやかな小説の同人雑誌をしておりますから、

そのたんび、お歌をお願いいたしますと、もう本当に、スピーディーでもって、とても良いお歌をパッと投稿下さいます。そうすると、先刻先生方がおっしゃいました様に、お歌を書かなければ、幸せじゃないかってお言葉は、男性だからそうなんですよと私は思っています。私は大伴さんが、今何を悩んでらっしゃるか、何に飲びを感じてらかっていうこと、スーと判るんです。これも何も私が歌が判るんじゃない、その歌の中の何かこう矢張り、絵と同じ様な色どりやそういうもんが判るんじゃないかと思ひます。これからの大伴さんの色々の変化、又お幸せやお悲しみ、そういうものを私は、又、期待してお待ちしております。

司会 どうも有難度うございました。歌を作るのは不幸せだなんていうのは、男の側の言い分だといわれて、何か先刻それを支持する様なことを言った司会者は、大変今不幸せになっております。(笑)そこで、今日歌人の生方たつゑさんがみえてるんで、男の側から見たんじや駄目らしいですから、女性として生方さんをお願いいたします。—拍手—
生方 本日は、おめでとうございます。司会者の方から、女が歌を作るのは不幸かどうか

かという問題を、私に出されたわけでございますが、私はそれを何かテストされております様なわけで、ここへ出た形でございます。

けれども、うっかりこういう所で、白状いたしますと、頭の回転の悪いのが、直ぐ判りますので、成る可くそういうことを外して今日は、お祝だけ申し上げたいと思ひんでございます。で、今度の「冬の旅」という題は大変良い題をおつけになったと思ひんでございます。丁度冬の旅の非常に複雑な楽章の中に底流しています、人間の孤独と云う風なもの、おそらく作者もねらって、あの題をおつけになったんではないかというのを想ひ少し脳味噌が足りないということ、御容赦いただきたいと思ひんでございます。それから宮崎さんは、つかって、私が第二歌集を出しました頃、しげしげとお手紙を頂戴いたしました、早川孝太郎様の奥様でいらっしやりましたというのを、つい此の間伺ったわけでございます。私は別に早川さんと、恋愛したわけでも何でもないでございます。(笑)

それは何か、民間信仰のことについて、大変ご親切なお手紙をいただいて、私はその頃少し柳田さんのものを、かじっておりましたもんでございますから、一寸お問合せいたし

ますと、とっても丁寧な、葉書を差上げますと大変ご丁寧なお返事をいただいた記憶を、もっているわけでございます。

その大変恋人の様にしょっちゅうお手紙をいただきました方の奥様が、宮崎様でいらっして、そして此度は風祭りという、いわば民俗的な未だ残っております、お祭の題をおつけになったという風なことも、大変お二人の題が、揃って良い題だということで、私は感心させられておりますわけでございます。で、そういう事で、何かお二人に共通したものが何かあるかしらと思ひまして、探しましたら牛をおうたいになった歌が、お二人にあるんでございます。で、その中の牛のみかたでございますけれども、これは人間の不幸の観方ではなくて、牛の観方でございますから一つ御容赦頂きたいと思ひます。(笑)

大伴さんのお歌の中に悠久の上という風な題がございます。それは矢張り「道」の中に底流している一つの精神を把握しようとする鋭い、内部を出したお歌だと思ひんでございます。これは

神として賞でられればこの国の御み牛静な目に人を見る
というお歌で、これは、外遊なさいました

時のお歌だと思ひんでございます。それから宮崎さんの方のお歌には

牛の目が青草を見る同じ様に青草をみるすべがなきなり

そういうお歌なんでございます。で、これがどういふ風にお二人の人生につながって行くかっていうことを、私のこの回転の悪い頭で考えてみたいんでございますけれども、矢張り大伴さんの方には、ご自分の孤独っていうものをしっかりとご自分自身が擱まえて、そして何か鋭い刃物の様なもので、ご自分を切り込んでいらっしやる。いわば、この土性骨の坐った孤独感という風なものをちゃんと握っていらっしやるって云うことを、このお歌から感じたいんでございます。宮崎さんの方は矢張り牛の目が青草を見る目と、同じ様に青草を見ている。そういう所に何か、自分自身の何かもうやりきれない憂うつなものがあるという事、大伴さんの立場と全然違いたいわば身のめぐりをくくっているのもやもやとした暗さというか、彫りという風なものの中で、自分自身が模索をしていらっしやる一つの悩みの様なものを、このお歌の中で、私は感じたいんでございます。で、大伴さん自身は非常に幸せでいらっしやるのに、何故歌を

作るだろうという風なこと、何かがあるんだらうという風なお言葉でございましたけれど、短歌を作る事が大伴さんのお持ちになつていらっしやいます、不幸と手をつなぐと云う風な事の意味づけを、どうしてもしなればならないとすれば、私は大伴さんの持つていらっしやいます、詩人的素質が自然に自分の孤独の恋も切りさいて、自分自身の姿を探そうとするそういう所にあるんじゃないかと思ふんです。これは、不幸、大変な不幸かもしれないけれども大変にお幸せなことだと思ふんでございます。で今日私も大変本懐とすることが一つございますので、寺内さんの本懐とどちらが重いか、一寸ご披露したいと思ふんでございます。それは堤康次郎様でございますが、あのその非常に立派な人物が、今度の冬の旅の書評を私が読売でほんのちょっぴりでございますけれどもご批評申し上げたことがございます。丁度ご入院中でございますから、お氣が一寸弱つていらっしやうた故かもしれないけれども、奥様に仰言ったそうでございます。私の所にお手紙に下さったんでございますけれども君の歌君と仰言たんだか、あなたと仰言ったんだか判りませんが、けれども、とにかく奥様のお歌が生方という

奴にとり上げられるということは今度は、自分の妻を見直す機会になったということで、大変お喜びになったということでございますから寺内さんの様な、その頭の回転のよい立派な方がオツムを上げられなかった堤康次郎さんが、始めて奥様にそう云う本音をおはきになったということ、これは、恐らくウンではないと思ひますけれども、大伴夫人は歌を作る方でございます。ウンはいわれなれないと思ひますから、その意味で、今日の私の本懐を今日のお祝の一番最後につけておいていただきまして、先程の司会者の仰言いたしました。それが不幸であるか幸せであるかということ、それは、又司会者の判断におまかせすることになります。——拍手——

明がありましてそして、安心しろという様な証言もありましたんで、ここに民俗学者の鈴木榮三さんがみえておられるんで、宮崎さんの若妻時代或は、そう云う年代のことに、時間が追っておりますんで、一、二分でお願い出来たら(笑)大変有難度いんですけれど鈴木 一、二分と云うことでございますから(笑)

お二人共お目出度うございます。先程から伺っておりますと、もう少し皆さん悪口いったらいいんじゃないかと、こう思ふんですが、私、もう一、二分で最後になって後味の悪いことになると思います。まず大伴さんのご本いただいて私に辞引き作っておりますから、じきに誤植が目につきますが「オーッこの歌集誤植があるな」というと「お父さんそういうもんばかり見て、芸術わからねえ」なつてこう言ふんで(笑)「芸術はどうか知らんけれど、誤植いかによ」といい乍ら、私の本もどうも誤植があつて、自分ながら何時も悲鳴あげているんでございますけれども、矢張り誤植が一寸目につきました。それから多少国文学も、やっているんでございますけれども大伴さんの歌で、何かこう主体と客体が一

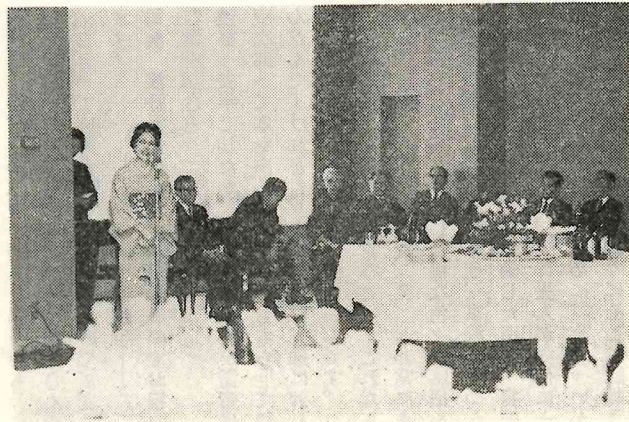
首の内に非常に複雑に入っている為に、私共素人が歌つてエものを考えますと、もつとスラッと印象する様な物が歌だつていう、ごく単純に考へてるもんですから、大変複雑だなあというんで、例えばモデルが前にいるんだらうな、画家はどっちにいるんだらうねえ。なんていう様な、一寸私共判らない様な場合がございまして、大分近頃の歌が、非常に私共素人には判らない様に進歩してらんだつていう事を(笑)痛切に感じたんでございます。実は素人を売り物にしている様でございますけれども、私も三十年位前は歌を作つておりました。そしてその頃、前川さんも歌壇の新星の様な存在でございまして、その頃の事だつたと思ひますけれども、小泉千樫のお弟子で、大熊長二郎さんが、歌集をお出しになつて、それを読んだ時に、私非常に漢語を沢山使っているなつて感じがしたんです。今、考へますと、その一冊の中で漢語を使った歌なんて先ず十何首位しかなかったんじゃないかと思ひますが、それでも、非常にそれが印象的でした。所が大伴さんのお歌見ますと漢語の興味でお作りになつたかと思つた様な歌もちょいちょいあつた様な気がするんでございますが、矢張り漢語でない、そのそれだけ

の複雑なものが出なくなっているんだらうとそういう風な気が非常に強くなりました。宮崎さんは、非常に麗人時代を知つておるんでございます。然しそれ言ひますと、大変長くなりまして、(笑)ご遠慮いたしまして、唯民俗学者の者から申して風祭という題に、おしまひの方へ宮崎さんが説明間違いだと思ひます。エー風祭りは船頭が風待ちをするためにお祭りをするつていうことは、一寸私信じません。大低は百姓が二百十日とか、そういう荒れ日を無事に過ぎた時とか、或は過ぎる様にとあらかじめお祈りする。それが風祭でございまして、海上のその波の方は、そういうのはないんじゃないかと思ひます。若しあれば、非常に民俗学的にも面白い例だと思ひます。私実は早川さんが私の勤め先の上役でございまして、長い事、ご指導を得ました。それで亡くなられた時の歌なんかは、本当に矢張り絶唱だと思ひます。外のはどうも何か、ニヤニヤしてる様だなあ、と云うんで(笑)もつと歌つてのはパリッとしなないのかあつていう。(笑)これも、又素人の考へて皆今の歌人が全部家持や旅人の様な歌を作つたら、こりやもう大変なことでしょうけれども、矢張りそういうご精進を今後お祈りい

たしたいと思ひます。——拍手——

司会 どうも有難度うございました。ドイツ文学者の芳賀檀先生のお祝の言葉いただきましたと思ひます。

芳賀 私がかねてから大伴さんのお歌と宮崎さんのお歌には深く感動している者でございます。日本の詩の伝統を極めて単純に又、お



どろくべき深さを以ってお歌いになっているので、まるで芭蕉とか、万葉の歌人がそこにはいないかの様に、或は完全に忘れられた様な驚きに打たれるのでございます。特に大伴さんの場合は、何か深い悲しみに貫かれて、むしろ、劇的といつていいような感動に打たれます。非常に厳しく、必死に作っていらっしやるってことで、これは、私が申す迄もなく、ドイツの詩人のライナー・マリア・リルケが若い詩人に与える手紙の中で、詩というもの、決して虚栄でもなく、又金の為にするものでもない。止むに止まれない動きである、若しお前が明日文学を止めるといわれるならば、生きて行かれないと思う人だけが文学をすべきだと言っておりますが、大伴さんのお歌は矢張りご自分で後書に書いておいででございますが、止むに止まれない営みであるという。そういうお氣持がありまして、それが矢張り本当の詩であると思うのでございます。そういう所から大伴さんの山に哭き、絵に哭き、歌に哭いて始めて、晴れ晴れとした顔で、人に向こうという様な、お歌がございましたが、そういう優れたお歌が出るのであらうと存じます。又、非常にスケールの大きな歌も沢山ございまして、外国の口

ーヤルや、アルプスの歌等、僕の非常に好む所でございますが、もう一つパウル・クレーの事を、歌っておいでになった。今始めて、大伴さんが、絵をお描きになるって云う事を聞いて判ったんでございますが、パウルクレーってのと大伴さんの歌とは、一寸結びつかない様に思いますが、矢張り未知未聞の空間を作らうと、そしてクレーの様に徹底した、そして透明な歡びに満ちた、ああ云う空間を描いていらしたろうと思ひまして、何か矢張り共通があるのであらうと思ひます。これからも、そういう未知未聞な領域をお開きになることを祈っておるのでございます。又、宮崎さんの歌集を拝見しまして、こりゃ又、実にやさしい、美しい女性的な小さな空間を創っておいでになる。その小さいっていうのは決してスケールが小さいって意味ではございませんので、実に密なあたたかい、情の深い空間で、上から見ても横から見ても、下から見ても、別な次元を開いていらっしやると思ひますので、これ等非常に優れた歌でございます。殊に宮崎さんの歌は何か人間の鼓動を聞く様な思ひが致したんでございます。でお二人に何か共通なものがあるかっていえば前川佐美雄氏の影響ではないかと思ひますが

前川さんが、この二人の優れた弟子をもつていらっしやるってことは、改めて前川さんのえらさっていうものを深く感じたのでございます。——拍手——

司会 浅野晃先生が来ておられるのでお祝の言葉を頂きとうございます。

浅野 去年でしたか、富沢有為男君が雷帝堤康次郎って本を出しまして、僕ももらって読んだんですけれども、大変面白い、殊におしまいの方へ行くと、非常に面白いんです。

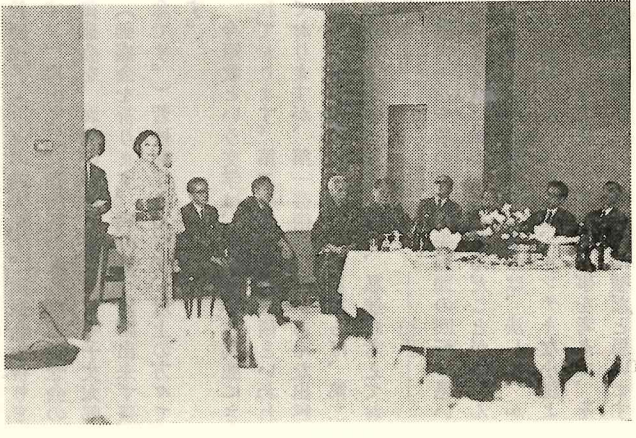
色々なことをああ云う言うこと、これなら僕ん所と余りちがいないな(笑)と非常にまあ、安心した様な感心した様な色々な感慨をもようしまして、それで早速、富沢君をつかまえて、色々それについて論じた所が、富沢君が力をこめてすね、大伴夫人が如何にえらいか、大伴夫人をかりそめに、みぢいかにぞって言うんで、僕は散々にそこで説教されました「ああそいじや僕は、大伴さんの歌集いつもいただいてたんだけど、もっと真剣に読まなきゃいかんと思ひながらすね、つい忙がしくて、今日も未だ本当に良く読まないで、上って誠に申訳ないんですけれども、然し先刻清二さんのお話なんぞ聞いてみますと、マ清二さんもえらいけれども、お母さん

もえらいんだなと思つて(笑)

どうも僕ん所の子供なんかの事など考えると、どうもしようがない。(笑)これは僕の家の場合は、矢張り女房が悪いんだらうと思ふんですけど(笑・拍手)然し、矢張り僕自身にもすね、どうもこりや矢張り駄目なのかなあと思つて(笑)僕もこれから改めて大伴さんのお歌を、みなげりやいけないと、まあ云う思つておりますけれども、その同じ様なことが矢張り、宮崎さんにもいえるんじゃないかと思ふんでして、宮崎さんも、まあ大変な苦勞をなされて、先刻田中君がいわれましてけど、僕はぐろりあに宮崎さんおられた頃に時々、言葉を掛けていただきましてですね。それは、非常に光榮(笑)の至りだという事が、今判ったもんです。僕は何でもない事かと思つたらさあ大変な事らしいです(笑)僕は非常にそれは幸福だったと思ふんですけれども(笑)それから、そのまま、早川さんの所へおいでになってからも、私は早川さんを非常に尊敬しておる一人でございます。けれども、どうも早川さん、何かおっかない人だもんですから、ついつい余りお近づきになりませんでしたけど、矢張り宮崎さんの場合も非常に、そういう大変な苦勞な

さつたわけですから、お子さんが今日おみえになれば、矢張り清二さんと同じ様な感があるのべられて、矢張り非常にうたれたことだと思ふんであります。で、私もここん所で、もう一度こりや真剣に、読まなくちゃいかな、と思つておるんですけれども矢張り、卒直にいいますと、非常にもの足らない所があるんです。それは、自分の事柄にあげて申し訳ありませんけれども、矢張り、も少しこうスカッと行かないもんかなあ、実はつい昨日京橋の美術館で、須田国太郎さんの遺作展見ましてすね。須田さんは、私共の高等学校の先輩なんです。けれどもあの一生涯の仕事をみて、非常に僕は感心しまして、矢張り油絵であすこまで、持ってたつていうのは、これはまあ大変な仕事だったと思ふんですけれども矢張り短歌の方でも、ああいう風な仕事がどんどん出来てこなげりやいけない。……前川さんの指導の下に、矢張り日本歌人あたりがああいう仕事をしなげりやいけないんじゃないか、という様な事、昨日感じて来たところなんですけど。生意気な言い方ですけれどもご精進いただく様にお願ひいたしました。

の歌集を見直さなくちゃいけないと、今浅野先生おっしゃったんですが、いらして下さった方々の中で、不ラチな人もいま読んでない方もあるかもしれせん。不ラチは、ご本をさし上げてなかったという理由がありましてその不ラチさの、おわびに帰りに、歌集を差し上げるそうですから、歌集の贈呈をうけて



お帰りになって下さいませ。お帰りになる話になってしまいましたけど、結局お二人が、西武関係だってことももう判ってしまいました。

西武の調査室長をなさっている、上野光平さんに、大伴夫人に限って短くお話ししていたらどうかと思えます。

上野 実は詩、和歌全く門外漢でございまして、命が燃えるという歌が自然に出来、歌は命の燃えを意味するということの様な理解の仕方きり出来ませんので、大変申し訳がないんですが、唯一つ、私フェミニストの立場から感想を申し上げたいと思えます。実ははじめに、大伴さんの歌集を頂戴しまして、秘に読ましていただきまして、不覚にも多少落涙をいたしました。一言で申しますと、可哀そうで可哀そうでし様がないう印象が第一でございませう。所がよく読み終えてみますと、この可哀そうではありますけれども、同情の声をかけることが出来るような、可哀そうではない。余りにも雄々しい、雄々しいが故の哀しさである。という風に私は感じました。まあ恐らく冬の旅を一生歩みつづけられるのか、或はその先に春の旅があるのか、私には良く判りませぬけれども、女一人冬の旅を大地をふみ

しめて歩むということも、意味のある人生ではないかと思えます。従いまして雄々しく、一つ冬の旅を歩みつづけていただきたいと、これが私の感想でございます。——拍手——

司会 宮崎夫人について、横田さんがおいでになっておられる様ですか。

横田 本日はおめでとうございます。早川さんと同じ部屋で働いておりますので、その縁で一寸お話し申し上げたいと思っております。早川さんは誠実な方でございまして、まぢがった事をなさらないという事で、一言がつかると思えます。大変に正しいことを強行される、ということでございます。又、大伴先生のお言葉を拝借いたしますと、早川さんは万年お嬢さんだと、これは如何にも早川さんによくあったお言葉ではないかと思えます。その面では、いわゆる万年お嬢さんで、永久に過していただきたいと思えます。将来両先生とも、どうぞ御体にお気をつけになりまして、精々その道でお進み願いたいと思えます。

司会 祝電が来ておりますので、披露させていただきます。(お仕事も益々豊かになることをお祈り申し上げます。)亀井勝一郎(道風祭り、冬の旅出版をおよろこびします。)

そういう事をただす為に、三月号では佐佐木信綱系の歌人の特集というのをやりました。その前には窪田空穂さん、その前が現在アララギにのっている人の特集をやったんですがこれから段々齋藤茂吉、北原白秋、太田水穂を、と云う風に、段々やって行きますが、歌

というものは、伝統の芸術というか、文学というか、そういうものになっているんで、夫が立派な先生について習練して、それで歌が上達するんだ、という様なことが、この特集号をやってみて判ったんですが、例えば、佐佐木信綱先生は、お父さんの弘綱さん、弘綱さんは、本居宜長とか賀茂真淵とか、そういう所から来ている系統をもっている。もう一方、香川景樹の未派からも、指導を受けている。そして、今の佐佐木信綱という人が出ていて、そのお弟子さんに前川佐美雄という人がいるという様なこと。前川さんという立派な先生もったお二人は、非常に勉強のしがいのある先生もったということになります。こういふ良い先生もったと云うことは、非常に大事なことで、先刻も前川さんに、二人共あなたのお弟子さんですか。こう聞いた「やー弟子なんて今、古いから」ってな事を言っていますけれども、我々は世間の

人も矢張りそういう風にみると思えます。ですから良い歌人になって生を顕賞すると、こいう云う風にこれから御精進お願いしたいと思えます。

司会 良い歌人になって、良い作品を書きました時は、どうかお二人を短歌研究で大いに推賞して上げて下さい。良い作品を書いたら矢張り、それにライトを当てるってというのが本筋だと思えます。是非支持していただきとうございます。司会者はこういう苦労も矢張りしなくちゃならないんで、自分乍ら、名司会者だなんて(拍手・笑)うっとりしていたりするんですが、もうこれでいよいよ放めんされる時が参りました。お二人に最後にご挨拶をしていただいて、この会を閉じさせていただきたいと思えます——拍手——

宮崎 本日はどうもありがとうございます。相にくの雪の中をお越し下さいまして、厚くお礼申し上げます。申し上げたいことは、頭の中に一杯ございまして、今それをどうしても口に出すことが出来ない事を正直に申し上げましてご挨拶にかえさせていただきます。どうも有難度うございました。——拍手——司会 大伴さんお願い致します。大伴 今日皆様こんな賑やかなお祝をし

鈴鹿俊子(カゼの為失礼す。御盛會を祈ります。)青山光二(御出版のお喜びと記念會の御盛會を、お祝いいいたします。)呼子丈太郎(御盛會を祈ります。病の為、出席出来ず残念です。)若狭菊江さんです、以上の方々です。

今短歌という文学は、小説家から馬鹿にされております。第二芸術、第三芸術といわれておりますが、第一芸術の小説があんな出鱈目ないんちきなことをしているならば、第二芸術の方が余つ程ましだと、私達は考えております。

歌マニアや歌の亡者へ先程頭の回転の悪い生方女史は、私のことを呼んだことがあるんですが、とに角歌というものは、決して、かりそのものじゃなくて、インチキな小説よりははずっと高級なんだと云う事を考えて、それを押し通して行かなければ嘘だと思えます。短歌研究の社長の小野昌繁さんが来られてるんで、同じ短歌に精進する者として、およろこびを感じておられる筈ですから、小野さんにお願いたします。——拍手——

小野 お二人にも短歌の為にも、お励しをいただいた諸先生、どうも有難度うございました。短歌研究で、歌の筋というか伝統どうか

ていただきました。もう先刻から汗がびっしり出ておりました。自分のこととなりまして、本当に胸が一杯で、まことに有難度うございます。今後共どうぞよろしくお導き頂きたいと存じます。

先生方もご遠方からお出で下さいまして、本日に唯感謝の外ございません。有難度うございます。——拍手——

司会 お二人の今後のお仕事、ますます立派なものとなって達成されることを、ここにいる皆の気持として持っているかと思えます。いつまでも、お二人の優れた作家の上になんか暖かいまなざしを、そそいで下さることを司会者としてお願いいたします。今日はお忙しい所をご遠方から、又雪の降る中をお集りいただきました。本日に有難度うございました。

花影 5月号 第3巻 第5号

昭和38年5月1日 印刷
昭和38年5月5日 発行

編集兼 宮崎 智 恵
発行人 (有)白馬印刷所
印刷所 豊島区池袋2-931

発行所 武蔵野市西久保3-65

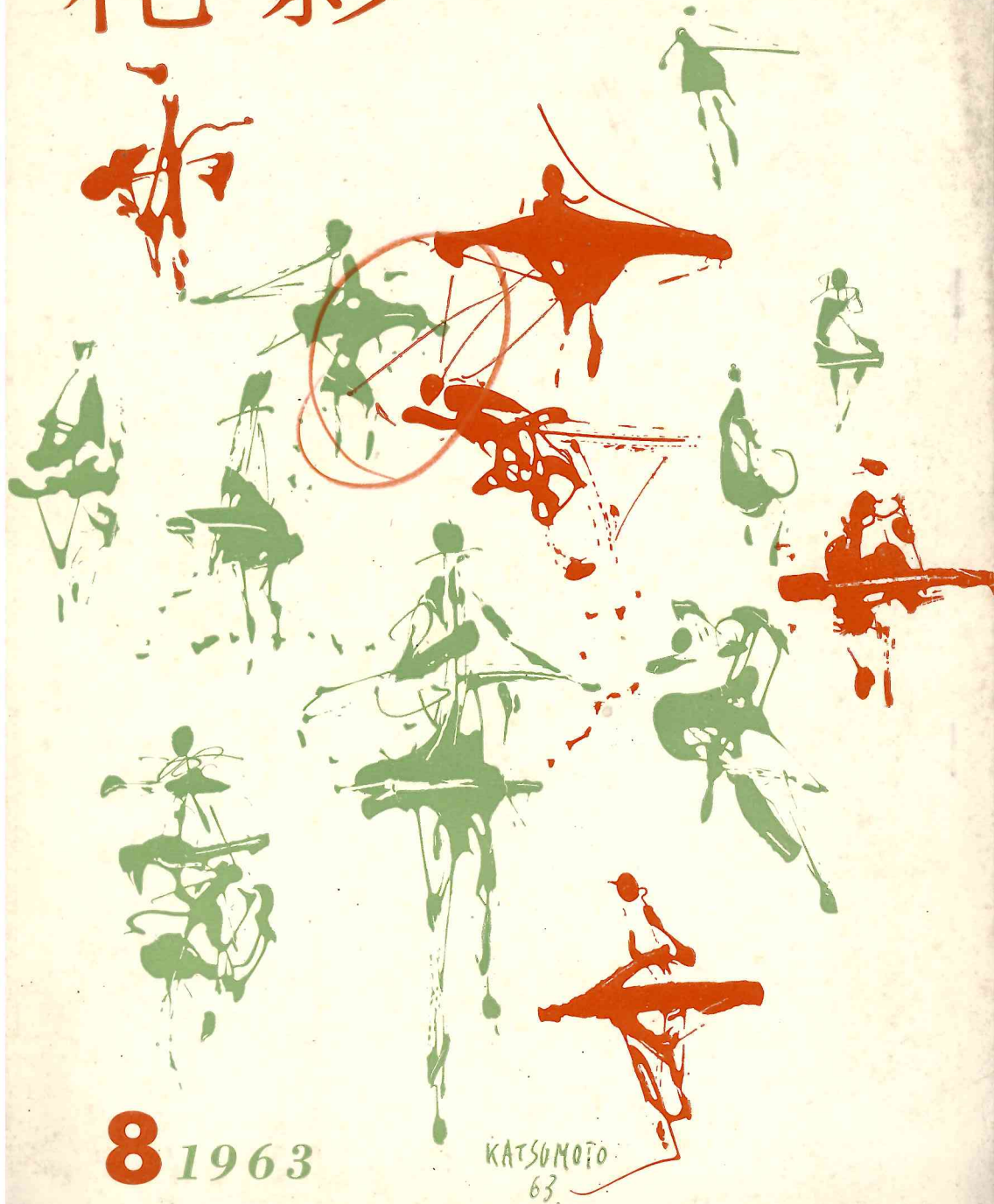
宮崎智恵方 花影発行所

頒価 100円 ㊦6円

花影

昭和37年5月28日第3種郵便物認可
昭和38年8月1日印刷 8月5日発行 第3巻 第8号 毎月1回 5日発行

花影 第3種郵便物認可
昭和38年8月1日印刷 8月5日発行 第3巻 第8号 毎月1回 5日発行



8 1963

KATSUMOTO
63.

全店中元大売出し

* エアークリーナーの
きれいな空気で

店内はいつもさわやか

seibu 西武

電話大代表(983)0151



花影 八月号 目次

タゴール語録	秦一郎撰訳	(3)
作品 I	宮崎智恵 大伴道子 苑 翠子 森重香代子 中市 弘 西岡晴男 加藤正民	(4)
秘 事	泉 朝子	(9)
作 品 II	高橋蕉雨 横山憲一郎 秋山末夫 中川三津子 菅 真穂 渡辺久子 山 年子 朝倉綾子 泉 朝子	(10)
「道」をよむ	田中克己	(16)
山に咲く花	絵 大伴道子 文 荒木益江	(17)
葉 月 集	守口忠夫 尾崎信千代 木村 一 莊 武彦 矢部育子 森 里津 松井典子 宿谷ゆかり 関根礼子 畠山英子 塩井ひさ 辻林美代子	(18)
回想の詩人タゴールとあの頃のこと	秦 一郎	(24)
なぜ採らなかったかということ	宮崎智恵	(27)
編集後記	宮崎智恵	(28)

表紙・カット 勝本富士雄
カット 大伴道子

タゴール語録

秦 一郎 撰訳

私は最上のものをえらぶことが出来ぬ、
最上のものが私をえらびとるのだ。

生をして夏の花のように美しく、死をして秋の葉のようであらしめよ。

私は悩み、絶望し、そして死を知った。だが私は、この偉大な世界に生れたことを喜んで
いる。

瞬間を怖れるな——かくて永遠なるものの声が歌う。

汝もし太陽を見失うとて涙するならば、汝はまた星をも見失うであろう。

神の大いなる力は静かな微風の中にあつて、嵐の中にはない。
彼らは憎み、また殺す、そして人々は彼らを讃える。

しかし神は赤面して、その記憶を青草の下に隠すことを急ぐ。

どの赤ん坊も、神がまだ人間に絶望してはいない、というメッセージを携えて生れて
来る。

われ存す、ということが不断の驚きであるのが人生である。

愛は喋らずにはいられぬ妻であり、

睡りは黙って堪えている夫である。

星は螢のように見えることを怖れはしない。

芸術家は自然の愛人である。かれは彼女の奴隷であり、主人である。

おん身の愛に信ず——これを最後の言葉たらしめよ。

「道」をよむ

田中克己

昭和三十三年に東京に参つてから、早いもので、もう丸六年になる。大伴さんとは上京早々前川先生に御紹介されて、おつきあひ出来るやうになつたが、いつも静かにほほ笑んでおいでなのを見るばかりで、お話もめつたに伺へないやうな始末である。しかし年月はありがたいもので「明窓」の時より「道」の歌の方がわたしに親しみぶかく感じられる。ただこの年月の間に、わたし自身は大変に身の上や心境に変化があつて、とりわけ詩歌とは縁がうすくなったので、批評とかいふものは出来るはずがない。しかし大伴さんの道を出来るだけ同道しようとの気持で、一生懸命よんでみた。結論からいふと、方々に全く同感出来る歌があつたのしかつた。たとへば

荷を累ねラインを遠く下る船見て居る時を雪降りつもる

といふ歌は、わたし自身も見てゐるやうな感荷を累ねラインを遠く下る船見て居る時を雪降りつもる

いつしかも一生を古りてわが歌は泣きつづけたる記録とならむ

終りに近い方に、こんな歌の一連がある。感心ばかりしてゐたわたしにも、この一連だけはひっかかった。これはよくないと思ふ。わたしこそ「一生」「古り」たけれど、かういふ風にはいふまいと思ふし、さう感じた時はセンチメンタルになつてゐると目ら戒める。常時、悲観落胆してゐるやうなこの痩せ男にも、明るい光はさしてゐるのだと、あとで証明されて、恨み、なげき、かなしんだことを悔いることが多い。ただ、ひとの悲しみがわたしを今だに泣く方に誘ひさうにしていけない。わたしのしつてゐる大伴さんの静かな笑みが、いつはりのものとは思へないとしたら、「泣きつづけ」なぞうそだと思ふ。どうぞそんなことはお歌ひにならないでと申し上げる。妄言多罪。

情を起させる。ラインはわたしの夢の中にたびたび出て来る川で、隅田川や淀川よりも親しいのだ。「見て居る時を」といふ一句がとてよくて、おだやかな、しかも愛情にみちた眼をもつて作者が見てゐるのを感じさせる。ただしもとより愛情をむりにもたねばならぬやうな情景ではない。ここには悲劇はないのだ。雪の中を荷舟が下りてゆくだけなのだが、わたしもこのごろそんな風景に却つて感動することが多いのでひどく心をうたれた。絶唱だと思ふ。「最上川上れば下る稲舟の」といふ唄があつたやうに思ふが、それよりずっと美しい。

野を広くケルンの雪に埋もれし土に戦の哀しみをきく

ケルンの戦といふのはよく知らないが、その戦ひの実況がわからないだけに、観念で受けられることが出来て、わたしの感情をあは

く(誤解しないで下さい、このあはくはわたしとしてのあはくで、世間一般の冷淡さではない。わたしはもとの兵である)適当に哀しませ、芸術的享受の範囲内で動かしてくれる(沖繩やサイパンは歌つてもらふには、あまりに強烈すぎるとわたしは思ふ)やはり佳作たるを失はない。

溪川の音き居れば間をおきて山鶯が何ごとか言ふ

これも上手だと思ふ。夜鶯が恋の歌をうたふのはハイネの詩にいくらかもあつて、その鳴き声を知らぬわたしはよくいらしたが、「間をおき」「何ごとか言ふ」といふのが、巧まずに上手だと思ふ。こんな歌ひ方をわたしは知らないのととりわけ感心した。

目の裏のあつきものみな澄みゆけりわれよりいでて野に満つる秋

前の歌と同じ感心の仕方をさせるのが「目の裏のあつきもの」それは泪のことをいふのかと思ふが、もつてまはつたいひ方、巧みないひ方といふより、作者にふさはしい表はし方——六年間でこれがいへるやうになつた——だと思ふし「われよりいでて野に満つる

山に咲く花

スケッチ 大伴道子
文 荒木益江



やぶれ傘 四月中旬山地の木の下に小人の国の傘屋の店開き。うぶ毛に包まれてつぼめた傘の形をしたやぶれ傘の芽出しです。

梅雨の頃には開いた傘に花茎を立て、白い小花を沢山つける。どの傘も縦き目が離れてバラバラ。免兎傘と書くのも面白い。



ほたるぶくる 淡紅、淡紫、白の提灯を下げた花は、夏草の中に貴婦人の感がある。子供が螢を入れるのでこの名があるとか。



のぼたん 浅草の植木市で紅紫色の花を沢山つけた鉢植えを買った。台湾、琉球が原産地で、常緑の灌木だと聞いて驚いた。

後 編
記 集

暑中お変わりございませんか、

渡辺久子さんから面白い手紙がきました。

「全くこの夏休みのアタマに来る事。毎日毎日がアビキョウウカンの巷であります。何しろ五分に一度は「お母ちゃんお母ちゃん」なので「お母ちゃん」一回に対して十円の罰金を申し渡した所それより「ママ、ママ」と舶来語に切換える始末。オマケに大小とりまぜてのお友達の一日常の訪問に流石の私もネをあげております。(中略)されば詩的ムードが起るどころか、新聞もろくに読めず、バン声はますますしわがれて、腕力を用いると、年のせいで息は切れるし、カレンダーをひとつかみ程むしり取りたい思いでおります。(後略)まったくご同感です。

山之口猿さんが亡くなりました。去年の秋のはじめ、軽井沢吟行会にご一緒にいきまし

たから、ご存知の方も多いと思います。告別式は詩人のおわかれにふさわしいものでした。ご遺族は静江夫人と令嬢泉さん、美しいお嬢さまが力強く生きていかれますようにと、かげながらお祈りしてまいりました。その日会葬者に配られた印刷物の遺影のうしろにあつた言葉。

御 礼

恩人ばかりをぶら提げて

交通妨害になりました

狭い街には住めなくなりました

山之口 猿

花影の作品のならべ方を変えたいと思つて今月はまだ合いませんでした。来月号から作品Ⅰ、Ⅱ、集に分けることをやめて、すつきりとその月々のよい歌の順に並べたいと思つます。よい作品を沢山お寄せ下さい。まだ一度も出詠しない方はぜひお作り下さい。

宮崎智恵

「花影」規約抄

- 一、「花影」は西武生活クラブ会員であればどなたでも入れます。入会金不用です。
 - 二、会費三カ月分三百円を納めて下さい。
 - 三、同人は一カ月二百円以上とします。
 - 四、入会の手続は、西武百貨店八階西武生活クラブ受付でいたしますが、会費の納入通信、送稿などは発行所あてにしてください。
 - 五、文章原稿は大判四百字詰原稿用紙を使用随筆の場合は三枚半または七枚にまとめて下さい。
 - 六、詠草は、かならず「花影」規定の用紙を使用すること。
 - 七、添削希望の方は二百円封入の上各選者あて直送して下さい。
- 宮崎智恵 武蔵野市西久保三ノ六五
大伴道子 港区麻布広尾町三 堤方
加藤正民 市川市須和田二ノ二〇七七
福島方

花影 8月号 第3巻 第8号

昭和38年8月1日 印刷
昭和38年8月5日 発行

編集兼 宮崎智恵
発行人
印刷所 (有)白馬印刷所
豊島区池袋2-931

発行所 武蔵野市西久保3-65
宮崎智恵方 花影発行所
頒価 100円 ㊦6円